WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人　野生動物救護獣医師協会

No.108

2019.3.25　発行

野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.108 目次

施設紹介ーいしかわ動物園・・2-3
日本のコウノトリ野生復帰の進展状況と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4-5
野田市「こうのとりの里」の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6-7
平成 30 年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修 報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8-9
平成 31 年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
書籍紹介ー「見つけて楽しむ 身近な野鳥の観察ガイド」（梶ヶ谷 博 編著）・・・・・・・・・・・・・・・・・11
寄付のお礼 ・・・11
事務局日誌 ・・・11-12

施設紹介

いしかわ動物園

（一財）石川県県民ふれあい公社　いしかわ動物園　獣医師　北川　和也

【施設概要】

いしかわ動物園は、1999 年 10 月に能美郡辰口町(現在は能美市)に開園し、2019 年 10 月には 20 周年を迎えます。緑に囲まれた 23 ヘクタールの敷地内で、自然を感じながら動物を間近で観察したり、動物とのふれあいを楽しむことができます。2018 年夏にオープンしたホワイトタイガーの屋外展示場では、トラが間近に接近する臨場感や、頭上を悠々と歩く空中回廊が好評です。またトキやニホンライチョウなど希少鳥類の保護増殖事業にも力を入れており、自然保護や動物愛護の精神を学べるような展示の工夫もしています。当園は石川県の公営施設であり、指定管理者制度により、一般財団法人石川県県民ふれあい公社が管理運営を受託しています。

ホワイトタイガーの空中回廊

トキ里山館

【救護施設の紹介】

野生傷病鳥獣の救護活動は、当園が石川県からの委託を受けて実施しています。県民が発見し保護した野生傷病鳥獣を受け入れ、診療後一定期間療養し、自然復帰を図ることを通じて、広く県民に鳥獣保護思想の普及啓発を行っています。

受け入れた動物は動物病院の診療室で治療し、療養施設である繁殖棟や野生鳥獣保護棟で一定期間飼育し、健康状態を十分に観察した上で、野外での生活が可能な個体を放野しています。

動物病院の診療室

繁殖棟

野生鳥獣保護棟

【救護実績・活動状況】

2008 年から 2017 年の 10 年間において、平均して 1 年間でおよそ 474 頭羽を受け入れ、その内訳は鳥類が 91%、哺乳類が 8.8%、爬虫類が 0.2%でした。全体の受け入れ数に対して、毎年 30～40%程度が放野にまで至っています。

保護される原因としては、車や建物の窓ガラスなどへの衝突が多いです。また春先から初夏にかけては、巣から落下したツバメやスズメ等のヒナが数多く運び込まれます。カルガモやニホンキジなどの卵や雛が持ち込まれることも多く、その孵化から育雛、そして放野までの一連の成長を見守るのですが、この時期は給餌をせがむ雛鳥の鳴き声でかなりにぎやかになります。しかし一般の方が保護すべきと思っても、その必要がない場合も多く、相談があれば詳しく状況を聞き取り、保護が必要と思われる個体だけを受け入れるようにしています。

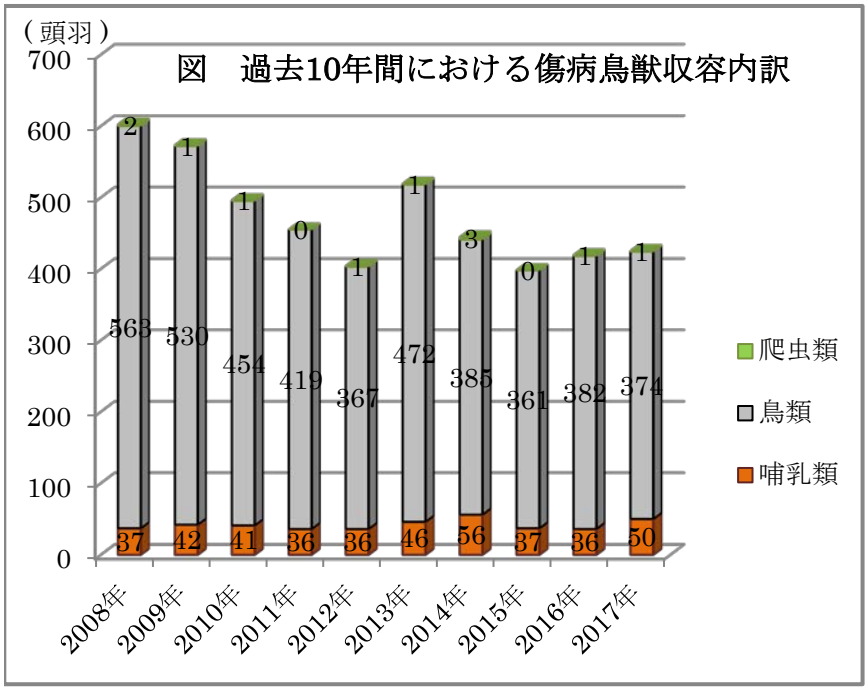
長年この仕事に従事していますと、時にはイヌワシ、クマタカ、チュウヒなどの希少野生動植物種や、絶滅危惧種であるコアホウドリなどが運び込まれることもあり、野生鳥獣の気高さや美しさを堪能しながら勉強することもできます。

哺乳類ではタヌキの受け入れ数が最も多く、ついでニホンカモシカとなっています。基本的には愛玩動物以外の在来野生鳥獣を受け入れていますが、農業被害が大きく、駆除の対象となっているニホンジカやイノシシは受け入れていません。またニホンカモシカやノウサギの幼獣においても、誤認保護がしばしばあり、可能な限り元の場所に戻すように促しますが、時間が経過したものについては受け入れて授乳することもあります。しかし人に馴れ過ぎたために、放野が困難になるなど難しい課題もあります。

また野生動物からヒトに感染するおそれのある疾患においては、今後もさらに衛生的な管理に努めることが重要であると感じています。近日ニュースにもありました重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、マダニが媒介するウイルス性疾患であり、タヌキやニホンカモシカなどの哺乳類に多数のマダニの付着を確認しており、ダニの咬傷にも気を配りながら日々の診療を行っているところです。

ニホンカモシカ

コアホウドリの放野



【教育・啓蒙活動】

負傷の程度がひどく、野生復帰が困難な鳥類を動物園内で展示することもあります。解説の中に、収容年月、場所、救護原因などを記載し、この種の鳥がわたし達の身近で生活していることや、人間活動が野生動物の生活に及ぼす影響等を発信しています。現在の小鳥ケージには、保護されたマミチャジナイ、トラツグミ、アオバト等を、個別ケージには、チュウヒ、ミサゴ、ケリ、バン、アカショウビン等を飼育展示しています。

また当園では、石川県の県鳥であるニホンイヌワシの保全ガイドを実施しています。当園で繁殖した個体を間近で観察しながら、姿形の素晴らしさだけでなく、生息環境の現状を知ってもらい、地域の自然保護についても考える機会を提供しています。

アカショウビンの展示

イヌワシの保全ガイド

【日本のコウノトリ野生復帰の進展状況と課題】

日本コウノトリの会　代表　佐 竹 節 夫

◆コウノトリ野生復帰の基本方向

コウノトリ（Oriental White Stork）は大型の肉食鳥で、生態系の頂点に立つ。本来は東アジアを広く分布域とする渡り鳥だが、環境悪化により生息可能な地域が狭められ、限定された地域での生息を余儀なくされている。

日本の個体群も同様に、明治期の近代化以降はほぼ豊岡市周辺に限定されて生息し、やがて 1971 年に野生絶滅した。「孤立した小集団」に陥った種の当然の帰結だった。

2005 年から始まった飼育下個体の放鳥事業により、今日では約 150 羽が野外で暮らすに至った。しかし、その半数は依然として豊岡市を中心とした地域（但馬・丹後地域）に集中しており、他の地域での繁殖は徳島県鳴門市と島根県雲南市の各１ペアしかない。全国各地に生息地を広げ、いくつかの地域個体群を形成させ、交流しながら種の存続を図る方向で取り組んでいくことが必要だ。

生息地を拡大するには、積極的、戦略的に様々な手を打っていくべきだが、当面、次の２つの方法が有効と思われる。１つは、言うまでもなく生息環境の保全、再生、創造であり、２つ目は繁殖行動への具体的誘導である。

この２つの方法をセットにして、各地にまず繁殖地をつくり、繁殖ペアを核にして地域個体群の形成を試みることが最良の策だと思っている。

◆まず、各地で繁殖ペアをつくろう

繁殖させることを最優先とするのは、次の理由からである。

現在、約 100 羽の独身個体が全国各地を飛翔しているが、その地に定着する個体はごくわずかで、ほとんどはしょっちゅう移動している。しかも移動距離は短いものから遠距離まで様々で、その範囲は北海道から沖縄県宮古島に及び、韓国へもこれまでに５羽が渡っている。コウノトリが１か所に留まらず広範囲に飛び回るのは、その地の生息環境が整っていないことに加え、本来は渡り鳥であること、さらに繁殖ペアがテリトリーを広く持つことが関係している。巣立ちした幼鳥は、全てがその広いテリトリー外に追い払われるからだ。

そして一方では、2005 年の初放鳥～昨年までで繁殖ペアが 24 組（豊岡 21 組、京丹後３組、養父１組、鳴門１組、雲南１組）形成されたが、その全てのペアが（数km未満の移動を除き）営巣地を離れず、留鳥化している。

歴史的にも、明治後期から昭和 34 年までの豊岡市内での野生繁殖では、「子は秋に南下したが、親鳥はその地に留まった」と記載されている。

また、2016 年からの鳴門市、2017 年からの雲南市での状況を見ると、１組の繁殖ペアが形成されると、他所から独身個体が次々と飛来するようになった。繁殖ペアの存在があたかもデコイのように「仲間がいる所に飛来する」効果を果たしているとも思われる。

以上のことから、日本では“一度、繁殖を成功させたペアは、その地を離れず、留鳥化する”と結論していいだろう。そして、

“繁殖ペアがその地に留まっていれば、外部から次々とコウノトリが飛来し賑やかになっていく”

“やがて、その中でペアリングが試みられ、適度な距離を置いてペア数が増えていく”

“それぞれがテリトリーを設けて暮らしていれば、次第に一定エリアで「地域繁殖個体群」が形成される”

現実には、そんな単純には進まないだろうが、現段階で最優先にやるべきは、「各地にまず繁殖ペアを形成させ、その地で繁殖実績をつくっていくこと」であると確信する。

しかし、コウノトリの生息環境が相当に劣化している今日においては、このまま手をこまねいて観察するだけでは解決に至らない。環境の保全、再生、創造と併せて、具体的に営巣を促す取り組みが必要である。

◆営巣誘導策としての巣塔の設置

営巣の可能性がある箇所に人工巣塔を建て、飛来個体に営巣を促すことが効果的だ。

人工巣塔とは、既設コンクリート柱（長さ 14m）を 1/6 埋設し、その上に直径 1.6m の円錐型メッシュ鉄製巣台を被せたものだ。これを営巣の可能性がある箇所に建立していく。

設置場所については、次のことを選定条件とした。

①これまでにコウノトリが飛来したことの実績があること。②地元にコウノトリ保護に関心があり、巣塔設置を受け入れる体制があること。③行政と連携できること（国の特別天然記念物及び絶滅危惧種に指定されているので）。④建立地無償提供の地権者同意が得られること。

巣塔設置場所の選定には、地理的、生物的な観点のほかに、地権者交渉を担う主体の有無、地権者の状況、行政の関わり方等を慎重に判断することが必要だ。

◆巣塔の設置状況と効果

上記により、私たちは 2017 年から巣塔設置に取り組み、2018 年度は 繁殖実績のある島根県雲南市、ため池ミュージアムが活動されている兵庫県高砂市､琵琶湖周辺で最多飛来の滋賀県長浜市の 3 カ所に各 1 基を設置した。

2 月 26 日、長浜市の巣塔にオス 1 羽が止まり、メス 1 羽が隣接電柱で見ていたとの報告があった。その後の状況は即巣づくりとはいかないようだが、長い目で見守りたい。

2 月 11 日、島根県雲南市からも朗報が届いた。昨年、同市内大東町地区の巣台が設置された電柱で営巣していたペアが、2017 年度に私たちが設置した市立西小学校の巣塔に巣材を運び込み、巣作りを開始したとのことだ。

2 月末現在では順調に巣づくりが進んでいるようだ。繁殖地を各地に増やす取り組みの最初の成果なので、このまま順調に推移し、産卵～孵化～育雛と進んでくれることを期待している。また、当該巣塔が小学校の敷地内であることから、常に教室から繁殖の様子を見ることができ、子どもたちにとってこの上ない刺激的な体験となる。これをいかに科学的に観察し、環境教育として教材に活用していくか、教師の腕の見せ所である。

巣塔の設置は、コウノトリを外から観察するだけでなく、周辺の人々に餌場づくりとしてのビオトープの造成や、生きもの共生型農業等に挑戦される方が現れるのが常である。地域における環境保全・再生・創造のシンボル的な存在ともなっている。

2019.2.23 西小学校巣塔に巣材を運ぶペア
撮影・石原康博氏

◆問題点と課題

問題点としては、次の 2 点があげられる。

1)巣塔設置場所の地権者交渉を担える人材（団体）の確保が重要。

土地に伴う様々な要素が絡んでくるため、言うまでもなく事業主体である私たちが赴き直接交渉することが望ましい。しかし、遠距離を移動してその都度交渉することは極めて困難だ。そこで、地元行政が代行、あるいは側面援護してくれることが好ましいが、行政は年度の途中にすぐに行動、とはならないのが通常だ。

おのずと、地元の活動家に交渉等をお願いすることとなる。個人対個人では、賃貸料なし、構造物を設置、コウノトリによる農産物被害の恐れ、外部からの観察者対策等々、困難な課題を克服するには非常に厳しいものがある。どのような形であれ、地元行政が設置行為を認知し、フォローしてくれることが必須だ。雲南市のように、行政が積極的に公共施設敷地を用意してくれる自治体もある。

また、高砂市のように地元で既存の協議会が活動されている所は、生物多様性の取り組みの一環として巣塔設置を受け入れられており、設置後は水田地帯のシンボル的存在となっている。

2)採餌環境づくりの方が疎かになる。

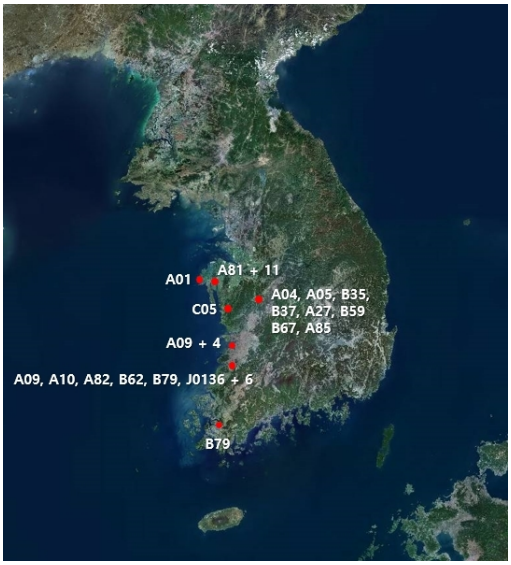
どうしてもコウノトリ自体に目が行くため、巣塔設置が優先され、環境づくりが疎かになりがちだ。巣塔設置と採餌環境づくりは車の両輪なのだが、併行して進めるには、やはり地元行政がコーディネートする必要がある。私たちとしても、まずは田んぼの中での工夫 ー例えば一角に常時湛水個所を設けるなどー や、小規模のビオトープを造成するなどを提唱していきたい。

◆課　題

野生復帰途上のコウノトリが広く全国を飛び回ると、必然的に１つの自治体では処理困難となる。常に自治体の境界線を越えてしまうからだ。国の統括が必要だが、コウノトリの主務官庁は文化庁で、補助事業を基本としているので難しい。

具体的問題として、どこかの地で怪我をした場合、対処する主体は当該個体を放鳥した自治体か、怪我をした自治体か、都道府県か、国か。仮に都道府県とした場合、誰が全国均一に徹底させるのか。

コウノトリ野生復帰は、進展すればする程、それに伴って次々と課題が出てくる。さらに朝鮮半島、中国、ロシアとコウノトリの飛翔範囲が広くなれば、課題は大きくなっていくことだろう。おそらく、元の東アジア分布域が復活した後も、人との共生への試行錯誤は止むことがないに違いない。



2019.2.25 韓国個体位置情報
A,B,C は韓国個体、J は日本個体、＋は越冬個体
（HP Eco-Institute for Oriental Stork より）

野田市「こうのとりの里」の活動

株式会社野田自然共生ファーム 主任飼育員　森　本　直　樹
〒278-0011　野田市三ツ堀 369 番地 TEL： 04-7197-1741

・こうのとりの里の概要

千葉県野田市では、『人もコウノトリも暮らしやすい自然と共生する持続可能な地域づくり』を目指し、平成 24 年より「生物多様性の保全・自然再生のシンボル」としてコウノトリの飼育を始めました。

翌年から繁殖に成功し、コウノトリの飼育展示を開始。そして、平成 27 年には、東日本で初めてのコウノトリの放鳥を行い、毎年育ったコウノトリの放鳥を続けています。

「こうのとりの里」の外観

展示スペースの様子

・コウノトリの飼育・放鳥の取り組み

こうのとりの里では、卵から孵化したヒナを育て、近年は巣立ちの時期に合わせて放鳥を行っています。コウノトリの繁殖は冬頃から始まり、産卵した卵は 30～32 日で孵化します。コウノトリは日本で一度絶滅した種であるため、遺伝的多様性に配慮した繁殖や放鳥が必要とされます。野田市で放鳥したコウノトリには、飼育中のペアが産卵した卵以外に、他の園館から移送してきた卵をペアに預けて孵化させた個体もいます。孵化後は親鳥がヒナの育雛を行い、約 2 か月で巣立ちします。

大型のケージ（内部から撮影）

小型のケージ

飼育ケージとしては、コウノトリを展示している大型のケージが 1 つ、小さいケージが 4 つの計 5 つのケージを所有しています。大型のケージは、幅 16.5m×奥行 30m×高さ 3～4mの広さがあり、中には巣台と餌場、止まり木、池が設置されています。この飼育ケージの横には、滑車が取り付けられ、滑

車を回すことで、天井の半分を開放することができる仕掛けが施されています。コウノトリの放鳥は、この大型のケージを利用し、ソフトリリースの方法で放鳥しています。放鳥後しばらくは、ケージの天井部分を解放したままの状態にし、野生で餌をうまく捕れなければ、ケージに戻ることができるようにしています。

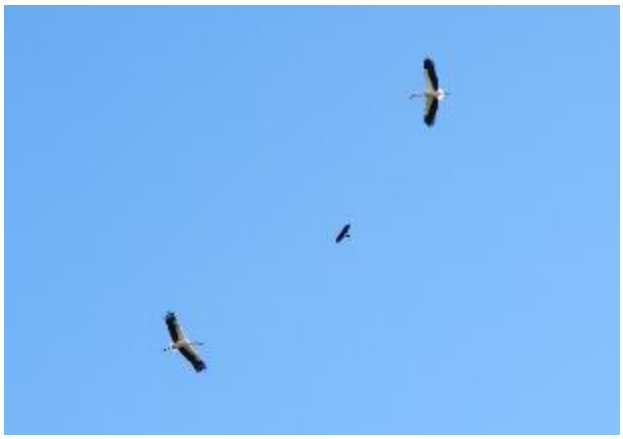
施設は、それまで生物多様性の保全・自然再生の取り組みが行われてきた江川地区という場所に建てられ、施設の前には復田した水田が広がっています。運が良ければ放鳥したコウノトリが施設前に帰ってきて、餌を探している様子などが観察できます。

・放鳥したコウノトリたち

平成 27 年から現在までに 4 回の放鳥を行い、合計 9 羽のコウノトリを野生に放しています。当施設には専任の獣医師がいないため、放鳥の前に地元の東葛地域獣医師会のメンバーに協力をいただき、健康診断と足環の装着を行っています。また、一部のコウノトリには発信機を装着してきました。放鳥後は、目撃情報と発信機による情報から、その後の様子などを確認しています。

平成 27 年に放鳥した個体は、施設周囲にとどまることなく、全国各地へ移動してしまいました。そこで平成 28 年に放鳥方法の改善を行ったところ、放鳥したコウノトリが数か月にわたって施設周囲で生活する姿を見ることができるようになりました。近年になって、コウノトリ同士が関東で出会い、一緒に行動する姿が観察されるようになってきています。

野田市では、コウノトリが定着し、繁殖することを目標に、現在は冬場の採餌環境の整備に取り組んでいます。



施設上空を飛ぶコウノトリとカラス

ドジョウを捕まえたコウノトリ

・最後に

「川で大きな魚を捕まえていた！」「畦でカエルを食べていた！」など、放鳥したコウノトリの嬉しい報告を耳にしますが、コウノトリが傷つく事故も発生しています。放鳥したコウノトリに関して、送電線・鉄塔などへの衝突事故が 2 件（事故現場からの推測含む）、釣り糸・釣り針に絡む事故が 1 件、防鳥ネットに絡む事故が 1 件の計 4 件の事故があり、3 羽のコウノトリが死亡しています。

今後、野外における生息数が増えることで、コウノトリが傷つく事故も増えていくことが予想されます。コウノトリが暮らすことのできる豊かな自然を取り戻すだけでなく、安全に暮らすことのできる環境作りが必要と感じています。コウノトリについて知ってもらうだけでなく、環境について考えてもらえるよう、今後も取り組んでいきたいです。

平成 30 年度油等汚染事故対策水鳥救護研修　報告

WRV 事務局　齊 藤 量 子

平成 30 年度の「油等汚染事故対策水鳥救護研修」(環境省主催)が、今年も環境省水鳥救護研修センター(東京都日野市)で開催されました。平成 30 年 9 月 18 日・19 日に第一回、10 月 25 日・26 日に第二回、平成 31 年 1 月 17 日・18 日に第三回を実施し、鳥獣保護行政担当者や動物園水族館関係者、獣医師、自然保護団体関係者やボランティア等、様々な立場の方々にご参加頂きました。

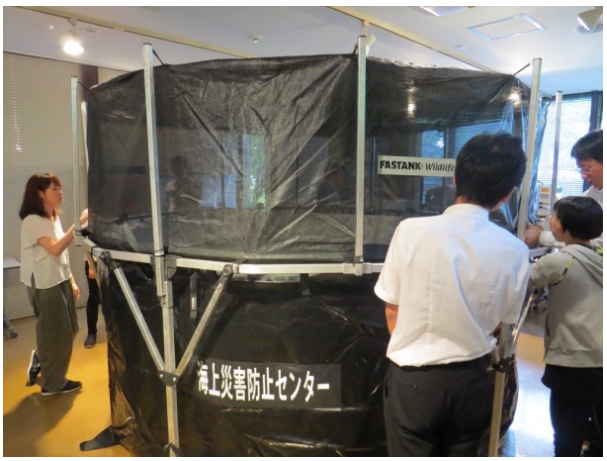
研修では、各分野の専門知識を持った講師による、油の性質や油等汚染事故の基礎知識、水鳥専用リハビリプールの組み立て、情報体制や具体的な対応体制づくり、水鳥の生態、油汚染鳥の救護・治療・リハビリ等、様々な分野にわたり実体験を交えた講義が行われ、参加者の方々はどの講義にも積極的に聞き入っている様子でした。

また、座学だけではなく、重油と鳥の羽を使った実験を行い、重油のにおいや羽に付着した様子を実感していただきました。更に、油に汚染されたという想定で、生体（アイガモ）の洗浄実習も行い、検査や強制給餌、洗浄方法も学んでいただきました。

参加者の方々からは、「洗浄の大変さを、事故が起こる前に知ることができてよかった」「今後自分がどう行動すべきか考えるきっかけになった」「油流出事故に限らず、今回得られた知識と技術を野鳥救護現場で活かしたい」等、たくさんのお声を頂戴いたしました。

また、交流会では、講師や参加者の方々が様々な立場の意見を出し合い、親睦を深められました。ここでの交流が、今後の体制づくり、そして有事の際のスムーズな実践行動に繋がるよう願っております。

講 義 風 景



リハビリプールの組み立て

身体検査実習

洗 浄 実 習

第一回から第三回の研修に加え、平成 30 年 12 月 12 日には、愛知県名古屋市にある名古屋市獣医師会館において現地研修が開催されました。参加者の募集については、愛知県獣医師会、そして名古屋市獣医師会にもご協力いただき、多くの獣医師の方々にもご参加頂けました。本研修において、普段野生動物を診察しない獣医師の方にも、野鳥の救護に関して興味を持っていただけたのではないかと思われます。

また、研修終了後の交流会では、様々な意見交換がなされ、盛況のうちに終了することができました。

現地研修講義風景

質 疑 応 答

これらの研修に参加された皆様が、得られた知識や技術、人脈を、今後の活動に活かしていただけますよう、切に願っております。

最後になりましたが、各研修会の開催にあたり御協力をいただきました、（一財）海上災害防止センター、（公財）日本野鳥の会、日本環境災害情報センター、愛知県環境保全課、名城大学、（公社）愛知県獣医師会、（公社）名古屋市獣医師会等、関係者の皆さま方に、心から御礼申し上げます。

◆平成３１年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」◆

ＷＲＶ事務局長　箕輪　多津男

ＷＲＶでは、（公財）日本鳥類保護連盟及び（公財）日本野鳥の会との共催により、平成31年度も引き続き、「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」を実施しております。

本年度のキャンペーンに関して、当協会あてにご協賛いただきました団体（または企業）は、それぞれ以下の通りとなっております。ポスターにも既にご芳名を掲載させていただいておりますが、今回も関係各位より多大なるご協力を賜わり、誠にありがとうございました。ここに、改めて深く感謝申し上げます。

＜ヒナを拾わないでキャンペーン／協賛団体リスト＞（４２団体：五十音順）

公益社団法人 愛知県獣医師会
公益社団法人 石川県獣医師会
おおくぼ動物病院
公益社団法人 大阪府獣医師会
公益社団法人 北九州市獣医師会
公益社団法人 京都市獣医師会
株式会社 キリカン洋行
公益社団法人 滋賀県獣医師会
NPO 法人 自然環境アカデミー
高尾霊園犬猫墓地
公益社団法人 東京都獣医師会
一般社団法人 長野県獣医師会
公益社団法人 奈良県獣医師会
新妻動物病院
公益社団法人 日本動物病院協会
一般社団法人 兵庫県獣医師会
公益社団法人 北海道獣医師会
一般社団法人 宮崎県獣医師会
ムナテックス 株式会社
野生動物リハビリテーター協会
公益社団法人 横浜市獣医師会
公益社団法人 秋田県獣医師会
一般社団法人 茨城県獣医師会
公益社団法人 大阪市獣医師会
公益社団法人 岡山県獣医師会
公益社団法人 岐阜県獣医師会
公益社団法人 京都府獣医師会
公益社団法人 神戸市獣医師会
公益社団法人 静岡県獣医師会
全国愛鳥教育研究会
東京環境工科専門学校
中津動物病院
公益社団法人 名古屋市獣医師会
公益社団法人 新潟県獣医師会
公益社団法人 日本獣医師会
馬場動物病院
文永堂出版 株式会社
公益社団法人 三重県獣医師会
武蔵村山ペットメモリアルパーク
森久保薬品 株式会社
公益社団法人 山口県獣医師会
公益社団法人 和歌山県獣医師会

会員の皆様には、このニュースレターとともに本年度のポスターを同封させていただきましたが、本キャンペーンの主旨をお汲み取りいただき、これからもその普及啓発のため、お力添えいただければ有難く存じます。

身近な野鳥を始めとするあらゆる野生生物と私たちヒトとの共生の実現、そして将来に向け、豊かな生態系の保全を確かなものにしていくことが、私たちの大きな目標となっております。

ＷＲＶではそうした目標の実現に向け、様々な問題解決への取り組みを、これからも展開していきたいと考えております。また、傷病野生鳥獣の救護活動につきましても、地道に努力してまいる所存ですので、皆様のご支援とご協力を、今後ともよろしくお願い申し上げます。

書籍紹介

「見つけて楽しむ 身近な野鳥の観察ガイド」（梶ヶ谷 博 編著）

本書は、WRV の研究部長を長年に渡り務めていただき、昨年日本獣医生命科学大学・教授を退官された梶ヶ谷博先生の編著による、これまでにない新たなスタイルの野鳥図鑑兼観察ガイドです。

本書の構成を見渡した時にまず斬新なのが、前半の「鳥をみつける・観察する」いう章で、私たちの身近な場所に少し目を向けるだけで、そこに様々な野鳥を観察できることをやさしく解説してくれています。特にそれぞれの環境や植生、人工物の設置等の条件の違い、あるいは対象となる野鳥の色彩と背景との関係や、観察する時間帯により、見つけることのできる野鳥の種類や姿、行動などが異なってくることを、初心者でもすぐに理解できるよう示してくれます。そして次の章に掲載されている「豆知識」のコーナーと共に、読者がフィールドにおいて、自分の頭で考えながら野鳥観察を実践していくことの大切さと面白さを、改めて感じさせてくれるのです。

後半を占めている「身近な鳥たち」の章では、私たちの日頃の生活圏において、いつでも観察できる確率の高い種を中心に、それぞれの生活史を盛り込みながらまとめられています。中に掲載されている野鳥の写真も非常に鮮明で、特に飛翔している時の翼の様子が克明にわかるものが数多く掲載されており、ベテラン観察者にとっても大いに参考になるものと思われます。また、それぞれの種の雛や若い個体の写真も豊富に揃えられていますので、救護活動の際にも役立つに違いありません。

なお、本書の著者には、これまでもＷＲＶの諸事業に大いにご協力いただいている(NPO)自然環境アカデミーの西教生、野村亮の両氏も名を連ねておりますので、読者の皆様にも、是非一度手に取っていただくことをお勧めする次第です。

（WRV 事務局長　箕輪　多津男）

「見つけて楽しむ 身近な野鳥の観察ガイド」　梶ヶ谷　博　編著　西　教生・野村　亮・山内　昭　著
本体価格 ： １８００円（税別）　サ イ ズ ： Ａ ５ 版　ペ ー ジ ： ２１６ページ
発 効 日 ： ２０１９年2月２０日　出 版 社 ： (株) 緑 書 房
◆問い合わせ先◆　(株)緑書房 販売部　〒103－0004　中央区東日本橋 3－4－14 OZAWA ビル
℡）03-6833-0560　E-mail:info@mgp.co.jp　http://www.pet-honpo.com

【　事務局より寄付のお礼　】

寄付ご協力者（敬称略）　（平成 30 年 12 月 1 日から平成 31 年 2 月 28 日）

○寄付金（一般）2018.12.1　2018 動物感謝デー in JAPAN（募金箱）　320 円

事務局日誌　2018.12.17～2019.3.17

＝＝＝　12 月　＝＝＝

20：練馬西青色申告会 第４回理事会（練馬区西青色申告会事務所）　出席：新妻、町田
23：第６回大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第５回講習（ペピイ動物専門学校）［大阪支部］　対応：中津
25：WRV ニュースレターNo.107 発行　対応：小松、箕輪、齊藤
26：環境省水鳥救護研修センター・大掃除（東京環境工科専門学校）　対応：皆川、齊藤
27~29：森の学校（丹沢自然保護協会）［神奈川支部］　対応：皆川

＝＝＝　1 月　＝＝＝

10,24：神奈川県野生動物リハビリテーター(２級)養成講座（実習）（水鳥救護研修センター）［神奈川支部］　対応：皆川、齋藤
13：南硫黄島シンポジウム 2019（東京都庁都民ホール）　出席：箕輪
17~18：第３回油等汚染事故対策水鳥救護研修　（水鳥救護研修センター）　対応：新妻、皆川、御厨、藤平、箕輪、齊藤
19：神奈川県野生動物リハビリテーター勉強会（夢見ヶ崎動物公園）［神奈川支部］　対応：皆川

20：練馬区獣医師会 新年会（メトロポリタンホテル） 出席：新妻、倉林、町田
23：かながわボランタリー基金21幹事会（県民活動サポートセンター）［神奈川支部］ 出席：皆川
24：練馬西青色申告会 新年会（メトロポリタンホテル） 出席：新妻、町田
27：第６回大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第６回講習（ペピイ動物専門学校）［大阪支部］ 対応：中津
27：災害動物医療研究会　第１回大会（大阪 ECO 動物海洋専門学校） 出席：羽山、皆川
30：平成 30 年度ＷＲＶ講習会 打合せ（日本獣医生命科学大学） 対応：加藤、箕輪

＝＝＝　２月　＝＝＝

02：獣医疫学会役員会（東京大学弥生キャンパス） 出席：加藤
07：「小笠原の野生生物保全への取り組み」講演会(日本獣医生命科学大学)　講師：荒井、出席：羽山、加藤、小山、中川、箕輪
07：神奈川県野生動物リハビリテーター(２級)養成講座（実習）（水鳥救護研修センター）［神奈川支部］ 対応：皆川、齋藤
07~11：第 18 回さがみ自然フォーラム（厚木市民交流プラザ）［神奈川支部］ 対応：皆川
11：かながわボランティアフェスタ（あーすぷらざ）［神奈川支部］ 対応：皆川
08：麻布大学同窓会（麻布大学） 出席：新妻
17：平成 30 年度野生動物救護獣医師協会 講習会［東京都支部］（日本獣医生命科学大学）
出席：新妻、小松、加藤、小山、倉林、皆川、荒井、小森、箕輪、齊藤
17：第６回大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第７回講習（ペピイ動物専門学校）［大阪支部］ 対応：中津
18：平成 30 年度第１回東京都外来鳥獣(アライグマ・ハクビシン)防除対策検討委員会（東京都庁） 出席：加藤
22~23：西表島・自然保護活動交流会（沖縄県竹富町） 出席：齊藤
23：「小笠原の野生生物保全への取り組み」講演会(東京環境工科専門学校)　［神奈川支部］ 講師：荒井、出席：皆川
23：日本野生動物医学会 理事会（TV 会議） 対応：羽山、加藤
23：ＷＲＶ会計に関する打合せ（立川事務所） 対応：小森、箕輪
24：ペンギン会議全国大会（江戸川区総合文化センター） 出席：箕輪
24：「小笠原の野生生物保全への取り組み」講演会（横浜市立野毛山動物園）［神奈川支部］ 講師：荒井、対応：皆川
28：WRV 監査、WRV 東京都支部監査 対応：新妻、倉林、町田、小森、箕輪

＝＝＝　３月　＝＝＝

01~31：動物たちの SOS 展「ヒナを拾わないで！」パネル展示（横浜市立野毛山動物園）［神奈川支部］ 対応：皆川
02：かながわ海岸美化財団・海岸美化団体交流会（藤沢土木事務所）［神奈川支部］ 出席：皆川
02~03：動物たちの SOS 展「ヒナを拾わないで！」ブースイベント（横浜市立野毛山動物園）［神奈川支部］ 対応：皆川
06：平成 30 年度山梨県アライグマ捕獲従事者養成研修会（山梨県庁防災会館） 出席：加藤
07：神奈川県鳥獣総合対策協議会・シカ対策専門部会（県庁）［神奈川支部］ 出席：皆川
09：東京港野鳥公園・油汚染事故水鳥救護講習会［東京都支部］ 対応：新妻、大窪、皆川、箕輪
10：野生生物保全センター講演会「アライグマとどう向き合うか？」（多摩動物公園） 出席：加藤
14：おやこの学び舎～放課後サイエンスワークショップ～（東芝未来科学館）［神奈川支部］ 対応：皆川
16：神奈川県野生動物リハビリテーター15 期生認定式（県民活動サポートセンター）［神奈川支部］ 対応：皆川、箕輪
16：神奈川県野生動物リハビリテーター研修（県民活動サポートセンター）［神奈川支部］ 対応：皆川、箕輪
16：第 54 回獣医疫学会学術集会・総会（東京大学弥生キャンパス） 出席：加藤
17：エコタウン市民講座「太陽光発電の 2019 年問題」（東松山市平野市民活動センター） 出席：新妻
17：獣医疫学会役員会（東京大学弥生キャンパス） 出席：加藤

野生動物救護獣医師協会　（ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ）http://www.wrvj.org/　(E-mail) kyugo@wrvj.org
NEWS LETTER No. 108　2019.3.25 発行
発　行：特定非営利活動法人　野生動物救護獣医師協会
事務局：　〒190-0013　東京都立川市富士見町 1-23-16 富士ﾊﾟｰｸﾋﾞﾙ 302
TEL: 042-529-1279　　FAX: 042-526-2556
発行人：新妻　勲夫　　編集文責：小松　泰史　　編集担当：箕輪多津男